－最終講義－

邂逅の人

川崎医科大学麻酔・集中治療学教授　左　利　厚　生

最終講義では30分と時間制限があったので，かなりの内容を省略したが，ここではその省略した部分を付け加えたので，少々長くなった．山口大学を卒業し，本日川崎医科大学を定年退職するまでの間に多くの人と出会った．そこで今日の講義にも「邂逅の人」と題し，その人達から私自身が学んだことを述べて私の本日の最終講義にかえる．

「患者に医療行為がどこまで必要かを適切に判断するのが医師の仕事だ」松江日赤外科時代（1967年）

1964年山口県立医科大学（現山口大学医学部）を卒業し，１年間のインターンの後1966年山口大学第一外科に入局した．第一外科は心臓外科を標榜していたので，当時はまだ症例が少なかったけれど心疾患の手術が行われていた．その麻酔は我々新入局者の仕事で，特に私は麻酔を担当する機会が多く，この頃から麻酔との縁が始まっていた様である．

入局翌年の１月日本赤十字社松江病院（日赤）外科に赴任した．大学の外へ出たのはこの時が初めてであった．部長の木村正也先生は陸軍士官学校から京都大学医学部を卒業し，出身地の松江で日赤の外科部長として勤務されていた．消化器外科の医師は木村部長，私と同年令の大沢先生（京大）と私の３人で，私と大沢先生が交互に麻酔し木村先生がどちらかを相手に手術をした．この病院にきて最も驚いたことは術後合併症が皆無であったことと手術時間が短いことであった．この時の印象からか，手術時間は短い程合併症が少ないという意識を持つようになった．木村先生は寡黙な方で世間話などする機会はほとんどなく，患者でさえ取り付く島がないと表現していた．だから何かの機会に木村先生がおっしゃった言葉は強く印象付けられた．「医師の仕事は患者に医療行為がどこまで必要かを適切に判断することである」．当時，血気はやる若い外科医には，言葉としては理解できたが実感はなく，病気は私が治してやるの意気込みだった．しかし，後に倉敷中央病院の集中治療部で仕事をするようになりこの木村先生の言葉の重みを実感することになる．

「明治維新にあやかり，山口大学麻酔学教室を世界の麻酔学の回天の場としたい」山口大学麻酔科時代（1989）

1968年に少々の外科的手腕と自信を身に付け，松江日赤より再び山口大学第一外科に帰ったが，相変わらず消化器手術では「鈎引き」，開心術では「麻酔」の日日が続いた．そのような時に，山口大学にも麻酔学講座が開設され，京都大学から40歳前の若き武下浩教授が赴任されてきた．柔和な風貌の内に秘められた麻酔科学と教育に対する情熱がやがて山口大学麻酔科を天下に知らしむことになる．武下先生の山口大学赴任時の心意気はまさに吉田松陰のそれであったようだ．「明治維新にあやかり，山口大学麻酔学教

川崎医科大学　麻酔・集中治療学
〒701-0192 倉敷市松島577
e-mail address：sari@med.kawasaki-m.ac.jp

Department of Anesthesiology and Intensive Care Medicine, Kawasaki Medical School：577Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192 Japan